法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

広がりのなかのカント哲学 : レッシング、ヘルダー、和辻哲郎

KASAHARA, Kensuke / 笠原, 賢介

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY
(巻 / Volume)
18
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
65
(発行年 / Year)
2022-12-29
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030898

広がりのなかのカント哲学

――レッシング、ヘルダー、和辻哲郎――

笠原賢介

はじめに

「教えることは学ぶこと」ということわざがあります。哲学科での一九年、この言葉を実感する日々でした。学生、院生、同僚の皆さんに感謝いたします。

この間、学部演習と講義ではニーチェと現代思想、大学院演習では、ガダマー、ハイデガー、カント『判断力批判』を取り上げ、研究はレッシング、ヘルダー、カントといった一八世紀ドイツの思想・哲学や和辻哲郎に取り組んできました。

これらはどうつながるのか。これからどのように歩もうとするのか。今日はその一端をお話ししたいと思います。

ただし今回は、カントを軸にしてそれを同時代のレッシングとの広がりのなかで考えてみたい。時間の関係でヘルダーは省略し、和辻は簡単に触れるにとどめます[1]。

カント研究は、カントひとすじというスタイルが多いかと思います。しかしここでは、カントを同時代の広がりのなかに置いてみたい。広がりといっても、カントからドイツ観念論・ヘーゲルへという広がりのなかに置くことも可能でしょう。しかしその場合、ヘーゲルによるカントの克服という物語に落とし込まれる恐れがある。そうではなく、カントを同時代の広がりのなかに置いて、同時代の思

想家たちと相互に照射することでカントの奥行、魅力、問題点を浮き彫りにしてみたい。

同時代というと、啓蒙の時代となります。啓蒙の時代を一七世紀末からフランス革命勃発の一七八九年までとするなら、一七二四年から一八〇四年まで生きたカントはほぼそれと重なります。『純粋理性批判』の出版は一七八一年ですが、著作活動は一七四〇年代末からです。カントは『純粋理性批判』を区切りとしてそれ以前の前批判期と以後の批判期に分けられ、しばしば、批判哲学の確立によって前批判期は用済みになったというようなことが言われますが、果たしてそうか。むしろ前批判期のさまざまな主題が批判期に継承され、深められたのではないか。カントには、同時代、ヨーロッパ啓蒙のさまざまな思考が流れ込んでいるのではないか。そう考えるわけであります。

本題に入る前に、このような視点を浜田義文先生とカッシーラーから学んだということを述べておきたい。浜田先生は一九八一年に『カント倫理学の成立　イギリス道徳哲学及びルソー思想との関係』を刊行しますが、副題が示すようにカントをルソーやイギリス道徳哲学（シャフツベリ、ハチスン、スミス）の広がりのなかで考察したものです。

カッシーラーは、啓蒙を技術的合理性や有用性礼賛の思想にすぎないというよくなされる見方を斥け、自然認識、自然観、認識論、心理学、宗教、歴史、社会哲学、美にわたる多様な思想を掘り起こした『啓蒙主義の哲学』を一九三二年に刊行します。ここに言う哲学は狭い意味での哲学ではなく、哲学者、文学者、歴史家、神学者、科学者、あるいはこれらいくつかの属性を併せもつ思想家たちが、時代の問題を共有し、影響を与え合いながら形成した思考の運動の網の目を指します。科学の発展、宗教対立、災害や戦争、非ヨーロッパ世界との接触がもたらした伝統的枠組みの危機に発する運動です。それがカント哲学の前提となったと見るわけです。『啓蒙主義の哲学』でカントは論じられていませんが、同書はカントを主題とする『カントの生涯と学説』（一九一八）と照応する位置にあります。

なお、カッシーラーは『啓蒙主義の哲学』で、ドイツ語圏ではライプニッツ、バウムガルテンのほか、ヘルダー、ゲーテ、レッシングといった文学者を取り上げていますが、この点についても一言述べておきます。カッシーラーは『実体概念と関数概念』（一九一〇）など理系的な業績で知られ、そこからすると文学者への関心はおまけ、あるいは古い教養主義の現われのようにも見えてしまいます。ですが、彼らへの着目はカント以後のドイツ観念論によっ

て抑圧された思考の可能性を掘り起こすものであり、言語や文化の多様性、動的な自然と有機体、感性と芸術をめぐるカッシーラーの関心につながっています。この関心は主著『象徴形式の哲学』（一九二三―二九）に示されています。カッシーラーは、カントを同時代の広がりのなかに置くことで、ハイデガーとは別の仕方でカントの可能性を発掘したと言えましょう。

カントとレッシング
――美的理念と『賢者ナータン』

さて、カントをレッシングの広がりのなかで見てゆきます。

まず、レッシングとはどのような人か。一七二九年に生まれカントより五才年下ですが、没年は一七八一年、『純粋理性批判』出版の年です。レッシングはドイツ近代演劇の確立に道を開いた劇作家として知られますが、著作活動の範囲は書評、翻訳、文学理論、文献学、美学、哲学に及び、雑誌編集者としても腕を振るいました。これらは別々のものではなく、網の目のようにつながって彼の著作の広大な世界を形作っています。

ここでは、死の二年前に書かれた劇作品『賢者ナータン』（一七七九）に焦点を当てます。第三回十字軍（一一八七―九二）の時のエルサレムを舞台にして、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの対立と架橋の問題、異なった考えの人々がどのように共存したらよいのかという問題を主題とする劇です。同時代にフランスのヴォルテールが『寛容論』（一七六三）を書いていますが、『寛容論』も『賢者ナータン』もこの問題についての近代の古典という位置にある作品です。

『賢者ナータン』とカントとの関係は、宗教の問題という点では宗教論、『単なる理性の限界内の宗教』（一七九三）、さらにその基礎にある『実践理性批判』（一七八八）などの倫理学と関係します。劇作品という点では『判断力批判』（一七九〇）、そこで述べられた美的理念の問題に関係します。

『デカメロン』と『賢者ナータン』

『賢者ナータン』は、ルネサンスの文学者ボッカッチョ（一三一三―七五）の『デカメロン』（一三五三）から題材を取っています。まずこの点を見ておきます。

『デカメロン』は、ペストの流行によって山荘に避難した十人が、毎日それぞれ一話ずつ十日間話をするという仕

組みの作品です。『賢者ナータン』の題材は、第一日・第三話「ユダヤ教徒メルキセデクは三つの指輪の話をして、サラディンがたくらんだ大きな危難をのがれる」という話から取られています。

サラディン（一一三八―九三）は十字軍と闘ってエルサレムを奪還したクルド人の王です。彼は寛大な王としてヨーロッパで長く記憶されました。話の場所はサラディンの支配するエジプトのアレクサンドリア。財政難を打開するために資産家のユダヤ教徒メルキセデクから金を巻き上げようとして、ユダヤ教とキリスト教、そしてサラディンの信仰するイスラームのどれが本物なのかと質問します。それに答えてメルキセデクが話すのが三つの指輪の話です。

古くから受け継がれてきた家宝の指輪を、ある時、父親が等しく愛する三人の息子に遺贈するために、もとの指輪とほとんど見分けがつかない二つの指輪を作らせた。この三つの指輪のどれが本物なのか、父の死後に三人の息子は争ったが、見分けがつかなかった。これと同じに、三つの宗教のどれが本物かは、いまだ解決されていない問題です。――メルキセデクはこう答え、それに感心したサラディンは、金を巻き上げようとした本心を打ち明け、メルキセデクはそれに答えて融資をする。その後、サラディンは借金を返済してメルキセデクを側近に迎え、友としての交わりを続けたとのことです。

レッシングはこの話の舞台をアレクサンドリアからエルサレムに移します。時も限定して、第三回十字軍の時、一一九二年に和平協定が結ばれて束の間の平和が訪れた一日の出来事とします。ユダヤ教徒のナータン、その娘のレヒャ、レヒャに恋をする十字軍の青年の神殿騎士、エルサレムを支配するイスラームの王サラディンを中心に劇が展開します。

三つの指輪の話は全五幕の劇の真ん中、第三幕に登場します。指輪の話によってユダヤ教徒のナータンとムスリムのサラディンの間に友としての関係が生まれ、キリスト教徒の神殿騎士とナータンとの間にも、さまざまな場面での会話を通してしだいに友としての関係が生まれます。アーレントはレッシング論（一九六〇）のなかで、これらの友としての関係を感情融合的な近代的・ルソー的な友情ではなく、談話によって共通のものが育まれて生まれる古代的な友愛（フィリア）と捉えますが、妥当と思います。

さて、そうこうするうちにナータンの娘のレヒャが洗礼を受けたキリスト教徒であり、ユダヤ教徒のナータンがレヒャを特定の宗教によらずに育てていたことが判明します。神殿騎士は激怒します。神殿騎士からこのことを聞き

知ったエルサレムの総大司教は「そのユダヤ教徒は火あぶりだ」と断じます。ここに示された問題は、中世のみならずレッシングとカントの時代、またその後も大問題でした。レッシングは、この事情が明るみに出れば人々の「憎悪と偽善」の攻撃に曝されることになるとナータンに語らせています。

親子と友の関係が破壊され、ナータンが社会的に抹殺される破局は、神殿騎士とレヒャが兄妹であり、二人の父がサラディンの弟アサットであったことが判明することで回避されます。アサットはムスリムでしたが、キリスト教徒の娘と恋に陥り、改宗してヴォルフ・フォン・フィルネクと名を改めてドイツに移住し、二人の間に神殿騎士となる男の子が生まれる。フィルネクは子供を残し、妻を伴って十字軍の一員として出陣しますが、パレスチナの地で妻は病死、フィルネクも戦死します。その間に同地で生まれたばかりの女の子（のちのレヒャ）は、戦乱のなかで幾度かフィルネクに命を助けられた友人のナータンに託され、ナータンはこの子をキリスト教徒としてでもユダヤ教徒としてでもなく、ひたすら愛情をもって育てたのでした。

美的理念と構想力

カントをこの作品の広がりのなかに置くとき、両者はどのように関係してくるのか。この点を考えるために、カントの『判断力批判』に注目してみましょう。

同書の第四九節では美的理念が論じられています。理念というとカントでは通常、理性概念、理性理念となりますが、ここでは美的理念です。同節では次のように述べられます。

> 美的理念ということで私が考えるのは、多くのことを考えさせるきっかけとなる構想力の表象である。だがこの表象は、いかなる特定の観念、すなわち概念もそれに適合することができない。したがって、どのような言葉も完全にはそれに到達できず、また理解させることもできない、そのような構想力の表象である（傍点は原文の強調、以下同）。

カントは構想力を再生的構想力と産出的構想力に分けます。前者は、連想の法則によって既知のものを再生する構想力。後者は、あらたな表象を産出する構想力です。右の

引用で問題にされているのは後者であり、美的理念は芸術の所産を指します。『純粋理性批判』では構想力を「直観の多様なものをひとつの形象（*Bild*）へともたらす」能力（A120）と説明しています。これをふまえるなら美的理念は、多くのことを考えさせるが、どのような既成の観念や概念、言葉にも包摂しきれない多義的で謎めいた相貌をもつ形象であると言えるでしょう。

『純粋理性批判』での議論からすれば、感性的な直観に提示されているものは概念に包摂できる。ところが美的理念は、感性的な形象としてありありと提示されていながらも概念に包摂できない。できないがゆえに多くのことを考えさせてやまない。そのような意味で、概念をこえた理念とされるわけです。

反省的判断力と規定的判断力

『判断力批判』の主題は、表題が示す通り判断力ですが、カントは規定的判断力と反省的判断力を分け、後者を考察の主題とします。美的理念の理解に関係するので、この点についても見ておきます。

二つの判断力の違いは次のようなものです。

> 判断力一般は、特殊的なものを普遍的なもののもとに含まれるものとして考える能力である。普遍的なもの（規則、原理、法則）が与えられているならば、判断力は特殊的なものを普遍的なもののもとに包摂するのであり［…］、規定的である。しかし、もし特殊的なもののみが与えられていて、判断力がその特殊的なものに対して普遍的なものを見つけ出さねばならないならば、判断力はたんに反省的である。

『判断力批判』序論・第四節の冒頭です。規定的判断力は「普遍的なもの」、概念がわかっていて、そのような既知の観念によって「特殊的なもの（das Besondere）」を包摂する。目の前のものをリンゴと認定するというのが単純な例でしょうか。これに対し、目の前にある「特殊的なもの」が何であるのか、それに対応する「普遍的なもの」が知られていない。そこでそれを見いだすためにあれこれ考えるというのが反省的判断力です。〈あれこれ考える〉という運動がここで「反省」と言われているものです。

右の箇所で反省的判断力は自然認識、とりわけ有機体の認識にかかわるものとして考えられていますが、『判断力批判』の本論では自然美や芸術にかかわるものとしても考察されます。先に述べた美的理念も「多くのことを考えさ

せるきっかけとなる」形象、つまり反省的判断力がかかわる「特殊的なもの」であるわけであります。自然、美、芸術、いずれにしても目の前にある「特殊的なもの」を既成観念で片づけずに〈あれこれ考える〉というのが要点です。

先ほどレッシングとの関係で言及したアーレントは、カントの反省的判断力を政治的判断力に読み替えて独自の政治哲学を展開しますが、これは何も華々しく政治をやるというのではなく、社会のなかの日々の出来事や事象を既成観念に解消して終わりとせずに向き合い、〈あれこれ考える〉ということが根底にあると言えるでしょう。これも反省的判断力の重要な働きの一つです。

美的理念としての『賢者ナータン』

『賢者ナータン』に戻ります。『賢者ナータン』は劇作家の技、芸術の所産であり、カントによれば美的理念となりますが、美的理念がもつとされる「多くのことを考えさせるきっかけとなる構想力の表象」という性格がこの作品のどこに見られるのでしょうか。

三つの指輪の話は寓話（パラーベル）です。寓話は古来、明瞭な言葉で語られながらも真意は必ずしも明瞭でない。さまざまな意味を汲み取れる。そのような逆説的な語りの形式です。新しいところではカフカの小説、ニーチェ『悦ばしき知恵』一二五番の「神の死」の語り方も寓話でした。

『賢者ナータン』では三つの指輪の寓話が、異なった宗教を跨いで取り結ばれた人間関係のなかにある登場人物たちが交錯する空間、多声的な劇の空間のなかに置かれています。それによって、寓話と劇の全体が、人びとに「多くのことを考えさせるきっかけとなる構想力の表象」となっています。以下、二点に絞って見ることにします。

ボッカッチョからレッシングへ

第一は『デカメロン』の三つの指輪の話に変更が加えられている点です。二つ指摘します。

『デカメロン』では二つの指輪は本物の指輪とほとんど見分けがつかないとされていましたが、『賢者ナータン』では、ほとんどが落とされます。

どの指輪が本物かは、外見や伝承、あるいは論証によっては決着がつかない。指輪の真偽はむしろ、指輪に据えられた石、オパールがもつとされる「秘められた力」、それを所持する者を「神にも人間にも愛される者にする」という「力」の有無、そのような行為を引き起こす「秘められた力」によるとされます。

三人の兄弟は指輪の真偽をめぐって訴訟になりますが、裁判官は判決のかわりに「汝らそれぞれが、指輪の石のもつ力が現われるよう競うがよい」と助言し、「幾千年を経たのちに」再び法廷を開こうと述べます。

裁判官の言うこの競い合いは、劇の内容に照らし合わせると、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムが住み分けたうえでそれぞれの〈陣営〉が行う競争ではない。そうではなく、対立する宗教を跨ぐ錯綜した人間関係のなかでの一人一人の行為にかかわるものとして提示されている。この点が重要です。

劇は一一九二年のエルサレムのとある一日、その終わりに危うく成り立った和解の出来事として提示されています。和解の瞬間、それと寓話の語る「幾千年」が対比されています。和解は困難ではあるものの〈今・ここ〉において不可能ではない。しかし同時に、指輪の真偽は「幾千年」のスケールで見定められなければならない。それらの視点に立ってどう考え・行為すべきか、という問いかけがなされていると言えるでしょう。

寓話に加えられたもう一つの変更は、話の始まり方です。話は「はるかな昔、東の方に一人の男が住んでおりました」で始まりますが、「はるかな」と「東の方」は『デカメロン』にはありません。先に述べたように、語られる場所は『デカメロン』ではアレクサンドリアですが、レッシングではエルサレムです。それを踏まえてエルサレムから見ると「東の方」は、ペルシアからインド北部にかけてとなります。「はるかな昔」は、確定はできませんが、紀元前から紀元前後、少なくともムハンマド（五七〇頃―六三二）以前となるでしょう。『デカメロン』では中世の地中海世界での話でしたが、『賢者ナータン』ではその外への時間的・空間的な広がりが与えられています。「東の方」は、三つの宗教が争うエルサレムのはるかかなたの場所となります。三つの宗教の話が提起する問題が、ユダヤ教、キリスト教、イスラームに限定されず、彼らにとっての〈異教〉を含む射程をもつ話に変化しています。

これに関連して『デカメロン』で三つの指輪の話をするのがメルキセデクだったのに対し、レッシングではナータンになっていることも指摘しておきます。メルキセデクもナータンも聖書に由来する名ですが、ナータンは『デカメロン』第一〇日・第三話に登場します。レッシングはそれも踏まえています。

第一〇日・第三話でナータンは、カッタイオに住む富裕で気前の良い人物とされ、その館は西方から東方へ旅する者も東方から西方へ旅する者もどうしても通らねばならない街道の近くにあったとされています。カッタイオは、現

在の中国の北部を指します。第一〇日・第三話でのナータンは、東方の人、東西交通路、シルクロードの人です。

これに対応してレッシングのナータンも、エルサレムからユーフラテス川、ティグリス川を越えて東方に旅して、インド、ペルシア、シリア、中国からの物産を取引する人物になっています。『デカメロン』の三つの指輪の話の源は中世ヨーロッパですが、レッシングでは、さまざまな民族や宗教が交錯する東西交通路のなかで経験を積んだナータンが語る寓話に変わっています。

『賢者ナータン』は通常、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの間の対立と和解を扱った劇とされます。それは誤りではないのですが、同時に、それと異なった東方へのベクトルが埋め込まれ、そこにも問いかけが潜んでいます。この点は、西欧の研究ではあまり注意されていないことですが、強調しておきたいと思います。

ここにも神々はいるのだから
遠慮なく入るがよい

「多くのことを考えさせるきっかけとなる構想力の表象」についての要点の第二は、『賢者ナータン』の表紙にラテン語で次の言葉が掲げられていることです。

ここにも神々はいるのだから、遠慮なく入るがよい！
ゲッリウスより

ゲッリウスは二世紀の古代ローマの文人で、「ゲッリウスより」は『アッティカの夜』という彼の雑録集からの引用であることを表わしています。ただし「ここにも神々はいるのだから、遠慮なく入るがよい」はゲッリウスの言葉ではなく、ヘラクレイトスの言葉として伝えられているものです。もとはギリシア語ですが、ラテン語に訳して『アッティカの夜』で引用されているというわけです。

この言葉は何を意味するのか。「ここにも」というけれど、エルサレムなのだから「神」がいるのは当たり前ではないか。また、「神々」ではなくて「神」ではないのか。これに加えて、不思議なことに『アッティカの夜』を見てもこの言葉は見つからないのです。劇が始まる前に色々と謎かけがなされているのです。

まず『アッティカの夜』にこの言葉がないという点を見ておきます。この言葉は一六世紀の古いバージョンの『アッティカの夜』の序言にあったものですが、校訂の結果、現在ではヘラクレイトスの言葉「博学は見識を教えはしない」に代えられ、ギリシア語原文で入っています。これが『アッ

ティカの夜』の正しい本文です。このことはレッシングの時代にはわかっていましたし、彼も知っていました。知りながらも、古い版から敢えて引用したのは、その言葉とその言葉が置かれていた『アッティカの夜』の文脈に意義を認めたからです。次にこの点を見ましょう。

「博学は見識を教えはしない」も「ここにも神々はいるのだから、遠慮なく入るがよい」もともにヘラクレイトスの言葉です。前者はディオゲネス・ラエルティオス（加来彰俊訳）『ギリシア哲学者列伝（下）』（岩波文庫、一九九四年）のヘラクレイトスの章にあります。問題は後者ですが、アリストテレス『動物部分論』にあるものです。

それゆえ、あまり尊くない諸々の動物についての探究を子供のように嫌がってはならない。なぜなら、自然本性的なものには、みな、何か驚嘆すべきものがあるからである。そして、実に、ヘラクレイトスは、こう言われている。すなわち、彼に会うことを望む人たちが家のなかに入ったところ、かまどのある炊事場で暖をとっている彼を見て立ち止まったので、彼はその客人たちに声をかけたのだと――つまり、「ここにも神々はいるのだから」と、恐れず入ってくるように彼は促したのであるから――。ちょうどこのように、すべてのものには自然本性的で善美なる何かがあるということを理解して、とまどうことなく動物のおのおのの種についての探究へとおもむく必要があるのだ。

（坂下浩司訳『動物部分論・動物運動論・動物進行論』京都大学学術出版会、二〇〇五年、八〇頁。一部表記を変更）

下等動物の探究を促す一節です。「自然本性的で善美なる何か」が一見して認められないものにもそれを見つけることができる、だから探究しなければならない、というのが主旨です。「ここにも神々はいるのだから」とは「自然本性的で善美なる何か」。「神々」がいそうもないところにもよく見れば「神々」はいるのだ、という意味になります。

レッシングが踏まえた古いバージョンの『アッティカの夜』はどうなっているのか。その文脈は、雑録集である『アッティカの夜』の編集にあたってはヘラクレイトスの言葉を念頭に置いて文献を広く探したものの、採用できたものはわずかだったというものです。アリストテレスでは「神々」がいそうもないところにも探究するなら「神々」は満ちているという意味になるでしょうが、『アッティカ

の夜』では「神々」がいそうもないところにも広く探すならわずかながら「神々」は見つかるのだ、ということになります。『賢者ナータン』では、このような含意の言葉が劇の始まりに掲げられている。劇の舞台は、入るのがためらわれる場所、「神々」がいそうもない場所とされているわけです。どのようなことでしょうか。

ヘラクレイトスのいた炊事場について、訳者の坂下氏は次のように注を付けています。――明らかに、訪ねてきた客人たちは、炊事場を、尊くなくて汚い（美しくない）場所だと思っている。これが動物の世界を表わしている。また、炊事場では鳥や魚を捌いていたであろうから、解剖にも対応するであろう（前掲書、八一頁）。ここからするならば劇の場所は、死屍累々たる場所ということにもなるでしょう。

『賢者ナータン』にはこのような言葉が冒頭に掲げられています。十字軍がもたらした修羅場の傷と記憶をさまざまな形で背負った人びとが暮らす場所、入ることがためらわれる場所、「神々」がいそうもない場所としてのエルサレムです。劇は、棕櫚の繁る光に満ちた空間のなかで静かに進行しますが、ヘラクレイトスの言葉は、登場人物の背後にあるリアルな事態を暗に示している。あれこれ考えることではじめて見えてくるようにしているわけです。

レヒャと神殿騎士の父であるフィルネクは、サラディンの弟アサットですが、パレスチナのアスカロンの近くで戦死したとされます。劇中にはっきりと示されてはいませんが、これはサラディンとの戦闘による戦死を意味します。戦闘の前にフィルネクは新生児の娘、後のレヒャを従者に預け、戦禍のなか何度かフィルネクに命を助けられた友人のナータンに託しますが、ナータンはその直前に、キリスト教徒の軍によって妻と七人の息子全員が家ごと焼死させられています。これは劇の終わり近くでナータンによって明かされますが、旧約のヨブ記を踏まえたものです。

ナータンは三つの指輪の話をするに先立って〈真理は貨幣ではない〉という趣旨の独白をします。ヘーゲル『精神現象学』の序文にも登場する言葉ですが、これは、ナータンの先の経験、ヤスパースの言う限界状況のなかで新生児を託された経験を踏まえてのものです。死屍累々たる状況のなかにも「神々」はいる。「自然本性的で善美なる何か」、「驚嘆すべきもの」は存在しうる、ということがこの劇の伝えようとすることの一端です。

以上『賢者ナータン』について、三つの指輪の話、ヘラクレイトスの言葉の二点にしぼり、どこに美的理念、「多くのことを考えさせるきっかけとなる構想力の表象」という性格があるのかを見てきました。細かい話でしたが、た

んなる穿鑿ではなく、レッシングが後世に託した遺書ともいえるこの作品に込められたものを現代に呼び出す試みとして容赦ください。

美的理念と図式

先に『賢者ナータン』はカントの宗教論や倫理学と関係すると言いましたが、この作品には、宗教論で説かれた倫理的に行為する者たちが「見える教会」をこえて形成する理念としての「見えざる教会」の問題、また倫理学の根底にある尊厳の問題と重なる事柄が提示されていると言えましょう。

ただし『賢者ナータン』は、カントの宗教論や倫理学の絵解きではない。カントの言葉で言えば図式（シェーマ）ではないということを強調しておきたい。図式は産出的構想力によって生み出され、『純粋理性批判』ではカテゴリーの図式が論じられます。しかし倫理的なものの図式は『実践理性批判』の禁ずるところです。『判断力批判』は、倫理的なものの図像（図式）化は、早わかりによって人びとを思考停止に至らせ、権力者に対して従順にするための手段となると指摘しています。

美的理念は図式とは逆のものです。それは形象（ビルト）ではあるが、特定の観念や概念の図式化や早わかりではない。むしろ「どのような言葉も完全にはそれに到達できず、また理解させることもできない」、そのような形象です。

美的理念の原語はästhetische Ideen です。ästhetisch は、もとは美的というより感覚的・感性的という意味の言葉です。感覚にありありと提示されている、それが美的理念における美的の意味合いです。そして美的理念というときの理念は、形象が感性的でありながらも、あるいは、感性的であるがゆえに、概念をこえるあり方をしている。既成の観念や言葉に収まらず、想像力と思考を惰性から解放するあり方をしていることを指しています。

『賢者ナータン』で言えば、この劇は明瞭な言葉で書かれ、各場面はありありと浮かび上がります。ですが、ヘラクレイトスの言葉、三つの指輪の話、さまざまな経験を背負った登場人物の発する声の交錯が相まって、全体が特定の概念や言葉で語り尽くせない形象となっています。

形象が誘発する想像力と思考の活動は、『判断力批判』の言葉で言えば悟性（知性）と構想力の遊動（Spiel）ということになります。Spiel は上演という意味でもあります。『賢者ナータン』で言えば、時と所に応じて無限に演出・上演可能である。それを引き起こすさまざまな問いかけを潜ませた形象であるわけです。

まとめ

『賢者ナータン』とカントの宗教論、倫理学、『判断力批判』はそれぞれ固有のあり方をしながら照射し合っている。カントをレッシングという広がりのなかに置くことで宗教論、倫理学、『判断力批判』が別々ではなく、それらをつなぐ脈絡が浮かび上がる。「見えざる教会」、尊厳、美的理念いずれにせよ、カント哲学だけを見ていたときには見えてこない事柄の奥行や問いが浮かびあがってくる、と言えるでしょう。

カントについては、その哲学の普遍主義、コスモポリタニズムにもかかわらず、西欧中心主義が潜んでいるのではないか、との指摘がなされています。キリスト教に限定した「見えざる教会」の理念は、その一例かもしれません。『賢者ナータン』ではキリスト教、ユダヤ教、イスラームさらにはそれらの東が視野に入っていました。カントをレッシングの広がりのなかに置くことで、新たな問いが浮かび上がると思われます。

レッシングは『賢者ナータン』の上演は不可能と考えていました。その内容が当時の常識とかけ離れていたからです。カントの宗教論も決して安全地帯からの議論ではなく、老年のカントが検閲当局の圧迫のもとで敢えて公刊した著作です。アーレントはレッシング論のなかで、カントとレッシングが生きた時代を共通の世界が失われた暗い時代と呼んでいます。これに従えば、カント、レッシングをはじめ啓蒙の時代の多彩な思想的営みは、暗い時代のなかにあって、それをこえるべく灯された光であったということになるでしょう。それらの光を孤立させることなく広がりのなかでとらえ、現代に呼び出し、受け止めてゆくことが求められていると思うわけであります。

《注》

（1）最終講義の文章化に際しては紙数の関係で和辻の部分は省略した。内容の一端は拙稿「和辻哲郎『近代歴史哲学の先駆者』とヘルダー――和辻哲郎文庫 *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* を手がかりとして」（『法政大学文学部紀要』第八二号、二〇二一年）の「むすび」を参照されたい。